

〔研究ノート〕

「カルヴァン全集」今昔

井上政己

カルヴァン全集 (*Opera Omnia*) とうたっているものが3つある。残念ながら、いずれも看板に偽りあり、正確な意味における全集ではない。キリスト教会はいまだかつてカルヴァン全集を有したことがないのである。

最初のいわゆる「全集」は、カルヴァンの死後半世紀を経た1617年にジュネーブで刊行された (*Iohannis Calvini Opera Omnia Theologica*)。フォリオ版7巻から成る。2番目は、さらに半世紀後、1667年アムステルダムから出た (*Ioannis Calvini Noviodunensis Opera Omnia*)。フォリオで9巻。カルヴァンの処女作『セネカ「寛容論」註解』は、この時はじめて全集に組み入れられた。それ以外は上記ジュネーブ版と大差はない。Schipper 版全集とも称され、次ぎに述べる全集刊行までの二百数十年の間広く用いられた。アルミニウスもジョンサン・エドワーズもこの全集からカルヴァンの神学を汲みとったわけである。因みに、19世紀に出た Tholuck 版『綱要』、『創世記註解』、『詩編註解』、『新約聖書註解』はこの全集のテキストに基づく。

3番目の登場によって、「全集」の量と質は飛躍的に向上する。『宗教改革者著作集』(*Corpus Reformatorum*) 中の「カルヴァン全集」(*Ioannis Calvini Opera quae*

supersunt Omnia) 59巻である。CR の略語で知られる『宗教改革者著作集』は、他にメランヒトン全集とツヴィングリ全集を含み、「カルヴァン全集」(通例 CO と略す)はその29巻から87巻を構成する。すなわち、CR 29イコール CO 1ということになる。この「カルヴァン全集」は、ストラスブールの碩学達が1863年から1900年にかけて編纂した、今日入手し得る最大にして最も充実した全集である。

今日入手し得ると言ったのは実は言葉の綾に過ぎない。百年前の出版、しかも、個人が架蔵するというより図書館向きであるから、今日売りに出る可能性は絶望的といっている。30年以上前に復刻版が作られた時、1冊42ドル(136マルク)セット価格1,715ドル(4,900マルク)というおおよそ非常識な値札がぶら下がった。数年前韓国で複製が出たが純然たる海賊版ゆえ言及を差し控える。もし百年前のオリジナルの全集がひょっこり市場に出ることがあれば、200万円以上の高値を呼ぶこと疑いない。日本だとその倍は行くかも知れない。

あだしごととはさておき、17世紀に出た2つの「全集」は、以下の理由で実質的な全集とは言えない。

まず、フランス語による著作を含まない。カルヴァンがフランス語のみで著した著作

にしてからが、本人以外の何者かによるラテン語を取める。ジュネーブ教会で用いた式文までがラテン語訳である。これは、ラテン語が *lingua franca* であった当時を反映しているのだが、それはそれで貴重な資料となる。一読後すかさず「ツヴィングリやエコランパディウスがこのカルヴァンのように論じることができたならば、長く不幸な論争はなかったろうに」と嘆息したルターが手にしたのはラテン語訳『聖餐論』であったし、ケムニッツがカルヴァンの著作中唯一賞賛した『占星術に対する警告』もラテン語訳なら、プリンガーやブーツァが読んだのも『再洗礼派反駁』のラテン語訳であった。しかし、厳密な意味において全集ととうたうためには、カルヴァン自身の驚ペンになるフランス語を取めていなくてはなるまい。

第二に、説教を含まない。例外は、ヨブ記と第一サムエル記のラテン語訳である。第一サムエル記の説教原稿は散逸してしまい、ただラテン語訳のみが残っている。カルヴァンの晩年から死後にかけて、二十余の説教集が出版されている。それらに印刷された説教の総数は780にのぼる。これらフランス語の説教をラテン語に翻訳するとすれば膨大な労力を要したことであろう。全集に取めること敬遠したゆえんである。ヨブ記と第一サムエル記の説教に関しては、1604年にすでにラテン語訳がなされている。

第三の不備は、書簡集である。ジュネーブ版全集、アムステルダム版全集ともにベザの書簡集を底本とする。しかし、この不備は大目に見なくてはならない。フランス

語の著作やフランス語の説教の存在を重々承知で黙殺するのは、看板にいつわりありと責められてもしょうがあるまいが、書簡に関しては事情が異なる。のちになってカルヴァンの書簡がさらに多く発見されたからで、故意の闕漏ではない。

幾多の病に触まれた肉のからだを脱ぎ捨てる日が近づいたある日、カルヴァンはベザを枕辺に呼んだ。「あそこに」と瘦せさらばえた腕を挙げ震える指で指し示し「手紙の束がある。種々勘考の上、些少なりとも教会を益することあらば、これを出版し後世に伝えよ」と託した。カルヴァン亡き後ジュネーブ教会およびアカデミーの重責を双肩に担うこととなった後継者ベザは、遺志完遂のために Charles de Jonvillers の献身的尽力を必要とした。最晩年のカルヴァンに仕えた秘書で、多忙を極める中であっても手紙は自筆でなければ失礼に当たると頑なに言い張るカルヴァンを説き伏せて口述筆記に踏み切らせた人物である。(私信をワープロで打つ当節の世相をカルヴァンはなんと言うであろうか) 彼が、ベザの全幅の委託を受けて、カルヴァンが残した手紙の束を整理した。のみならず、手紙の受取人を訪ねてはカルヴァンの手紙をねだった。それが叶わぬとあらば、筆写してジュネーブに持ち帰った。こうして、20年の歳月をかけて収集・整理した書簡をベザが監修したのが、*Ioannis Calvini Epistolae et Responsa* (1575) である。この書簡集は総数399通の手紙を取める。内訳は、カルヴァンが書いた手紙299通 (内27通はフランス語で書かれたもののラテン語訳)、カルヴァン宛の手紙88通、その他12通。しかし

これは現存する書簡のすべてではなかった。交通手段が著しく不整備で、それすら度重なる戦火で遮られる当時に、これだけ蒐集しただけでもヘラクレス的と言うに充分値する。(因みにアムステルダム版全集は417通を収録する。)

19世紀に入ると、Bonnet や Herminjard その他によるカルヴァン関係書簡の発掘が相次いだ。ボネの書簡集は英訳4巻の底本をなすもので、683通のカルヴァン書簡を輯める。エルマンジャール9巻は、フランス語圏宗教改革に関わる書簡をことごとく収録せんとする茫洋たるプロジェクトで、半世紀に及ぶ偉業は惜しくも編者の急逝によって中断された。だからこの書簡集は1544年で唐突に終わっている。従ってカルヴァンに関する限り、自身の書簡198通、カルヴァン宛181通を数えるのみだが、丹念な時代考証と堅固な校合と詳細かつ正確な註のゆえに貴重である。また、ボネ、エルマンジャールとも、フランス語の書簡をフランス語のまま編纂している点が注目される。いずれにせよ、こうした探訪と研究の成果が次ぎの「全集」を豊かに潤すこととなる。

CO の書簡集は59巻のうち11巻を占める厩大なものである。総数4,271通、カルヴァンの筆になるもの1,197通、カルヴァン宛1,571通、文中カルヴァンへの言及を含むもの1,503通。今でもたまに新発見があるにはあるが、これで現存するカルヴァン関係書簡をほぼ網羅しているとみていい。(余談ながら、カルヴァン自身がしたためた手紙の半数に相当する600余通は、英語はおろかどの言語にも翻訳されていない。

Reformed Theological Seminary の Douglas Kelly がその600余通の英訳を出版すると言っていたのが20年も昔である。立ち消えに至ったと判断せざるをえない。)

ジュネーブ版、アムステルダム版と異なり、CO は、フランス語の著作を積極的に収める。フランス語で書き下ろされたものは言うに及ばず、カルヴァン自らフランス語に翻訳したことが確証されるものはラテン語とともにこれをも収める。かくして『綱要』、『聖書註解』のフランス語版がはじめて全集に組み入れられた。ただし、よしフランス語の書き下ろしであれ、フランス語を解さぬカルヴァンの同時代人が読んだラテン語訳テキストを併録しなかった編集方針はいただけない。

ストラスブールで編まれた全集にふさわしくフランス語を重視する傾向は当然カルヴァンの説教にも及ぶ。先程16世紀に印刷された説教が780あったと述べた。CO はこのうちの750に加えて、アムステルダム版全集から第一サムエル記の説教(ラテン語訳のみ現存)107を収録する。しかし逆に言えば、これだけしか収録しなかったところに、史上最大にして最も充実しているこの「全集」が、なおかつ真の意味での全集たりえないゆえんが存するのである。

1536年9月1日以来カルヴァンは年平均100以上の説教をした。メモなし原稿なしである。やがて速記者を動員してこれを書き取ることが行われるようになった。カルヴァンの死後2,300を越える説教の速記原稿がジュネーブ市の蔵に保管されていたらしい。らしいというのはその後散逸の憂き目にあったからである。1805年にジュネー

ブ図書館が反古同然に屑屋に売り払うという事件もあった。あれやこれやで、16世紀に印刷されたものを含めて1,460の説教が私たちの手元に残っている。680は手書き原稿のままである。つまりこの「全集」は約半数の説教を割愛したことになる。

編者たちは説教原稿の存在を知っていた。のみならず、これらを編纂することが当初の方針であったことが第1巻目の序文にうかがえる。しかるに彼らは途中でその方針を変更した。カルヴァンの説教が伝えられずとも後世にとって大きな損失ではあるまいと判断するに至った、と言い出すのである。カルヴァンの説教がどのようなものであったかを知るにはここに収めた数で充分であろう、カルヴァンの聖書解釈を知るには註解書があれば説教は不要であろう、と。しかしこのもっともらしい言い草はその実巧妙な言い逃れに過ぎない。

この編者たちの paleography (古文書学) はかなりあやしい代物らしく、16世紀に印刷されたテキストを写すのでさきかなりの誤写があると指摘されている。ましてや、当時の手書き原稿の解説・筆写は、このストラスブール三羽鳥のとうていおよびうる仕事ではなかったであろうこと推測に難くない。

はからずもここにおいて CO の限界と特徴を言い当てることができる。質を捨てて量を追うことが彼らの編集方針の本音なのであった。収録数は圧巻なれどテキストの信頼性は乏しい。そもそも編者たちは諸本を対校し異本を校合して信頼できる校異本を編纂するつもりで毛頭ない。ラテン語の著作に関してはアムステルダム版全集の

テキストを踏襲したに過ぎない。フランス語の著作も16世紀に印刷されたテキストに依っている。説教に至っては上に見た如しである。つまり、CO の編者たちの至上使命は、もはや稀覯書に属するこれまでに印刷された著作を一同に集結し全集という統一規格の下に再版することであつたとしか思えない。

テキストの異同やカルヴァン自身の改訂・増補の跡を辿る apparatus criticus を完備した校訂本なくしては、真のカルヴァン研究は成り立ち得ない。翻訳もまたよくなされ得ない。『綱要』と若干の小品に関しては、*Calvini Opera Selecta* (1926-52) がその欠けを補ってくれた。さらには、World Presbyterian Alliance がカルヴァン説教集編纂委員会を設け、広く世界の学者の協力を要請して *Supplementa Calviniana* を刊行中である。ただし早30年、作業は遅々として進まない。

進行中の新版「カルヴァン全集」をご紹介して稿を閉じる。International Congress on Calvin Research が母体となり、世界各国の学者が手分け・分担して編纂にあっている。編集方針は、先ず、原則として初版を底本としそれ以降の版との異同を明らかにする。例外は『綱要』と聖書註解で、この場合、最終版を底本としてそれ以前の版との異同を記す。こうした textual-critical apparatus の他に、文体、言語、歴史的背景、人物、事件に関する註を施す。直接的引用は可能な限りその出典を突き止める。間接的引用の出典は重要と判断される場合に限り挙げる。カルヴァンの他の著作との並行箇所・類似箇所を指摘する。さ

らには歴史的・神学的解題と詳細な索引を備えるという徹底ぶりである。1992年に『ガラテヤ、ピリピ、エペソ、コロサイ書註解』が、2年後に『第二コリント書註解』が、さらに2年後に『ヘブル書註解』が出

版された。『ヨハネ伝註解』がこれに続く予定である。完結の暁には、初の完全に信頼しうる「カルヴァン全集」となるわけだが、いやはや半世紀やそこらで完結するや否や全くもっておぼつかない。